

Chieko Oku Piano Recital

奥 千絵子 ピアノリサイタル



モーツアルト生誕250年
(1756 ~ 1791)

シューマン没後150年
(1810 ~ 1856)



2006年12月11日
王子ホール

主催：東京カンマーコレーゲン
後援：在日オーストリア大使館 日墺文化協会

ご挨拶

本日は年末のご多用中にも拘わりませず、リサイタルにお越し下さいましたこと、心よりお礼を申し上げます。思い返せば、前回の自主公演から早いもので8年の歳月が流れています。乳癌ではないか？この不調は転移によるものではないか？と危惧を抱いてのコンサートでした。その年に癌は取り除き、翌年には不調の原因が膠原病の皮膚筋炎であることが判明しました。4ヶ月の入院治療と引き続き自宅療養を経て、完治する病気ではないと言われつつ、そして実際に波はあるものの、緩解状態を保つことが出来るまでになりました。

しかし、人生は平坦な道ではないことを更に知らされたのは、2002年の火災でした。その年に他界しました義母の遺骨がまだ自宅にあり、その蠟燭からの出火は既に家の外にまで炎が達していたのですが、我々家族は気が付かず、向かいのマンションの方から第一通報が行きました。十台以上の消防車が、一体どれだけの消火栓を使って消火活動に当たってくださったことでしょう！生憎母屋は全焼してしまいました。義父のアトリエ（田中春弥・洋画家）もそこにあった絵画も、居住部分の全てが一義父母が築いた歴史の何かもが一瞬にして無くなってしまったのです。主人の仕事場も然り、コントラバスも楽譜の一部も私のアップライトのピアノも炭と灰になってしまいました。消防隊員の必死の活動で、私の1917年製ベーゼンドルファーの置いてある部屋、壁一面の楽譜、室内楽用にアレンジした楽譜などは難を逃れることができました。何という感謝でしょう！

燃え盛る中、隣家のSさんはご自宅を開放してくださり、我々のみならず消防隊員も自由に洗面所を使わせて頂きました。夜はお風呂までも…。又、焼け跡から何か貴重品や想い出深い品は無いか、と毎日スコップで掘り出しては運んでくださった方々。日々お総菜を届けてくださった、子供たちのお友達のお母様であるYSさん、カンパを集めてくださった中高時代の仲間たち、力を付ける様にと遠くから饅頭の蒲焼きを持っていらして下さった習い事のクラスメートTさん、等々書き出せば切りがありません。この場をお借りし、心からお礼を申し上げます。

燃え残った家の改装中に、今度は莫大なシロアリの被害が発覚しました。北側の壁板のみならず、柱が全て食べられていたのです。あの頑丈であった筈の柱が、指先でつまむとサラサラ粉々に散ってしまうのです。

ここでも多くの方々に支えられ、母屋が火災保険に入っていなかったにも拘わらず、何とか現在の家を建てるに至る事が出来ました。火災から全ての解体・新築まで、まる2年の月日がかかりました。

公の場で演奏出来る日が再び来るなど、全く思ってもみないことでした。何もかも言葉が見つからないほど感謝致しております。

長々と失礼致しましたが、数年間の感謝をこの場をお借りして述べさせて頂きます。本当に有難うございました。

奥 千絵子

プログラム

W.A. モーツアルト デュボールのメヌエットによる9つの変奏曲 二長調 K.V. 573

R. シューマン 幻想曲 ハ長調 Op.17

第1楽章 Durchaus phantastisch und leidenschaftlich vorzutragen

（終始幻想的に且つ情熱的に演奏すること）

第2楽章 Mäßig, Durchaus energisch

（モデラートで、どこまでもエネルギーに）

第3楽章 Langsam getragen, Durchwegs leise zu halten

（ゆったりと演奏し、一貫して静かに保つこと）

W.A. モーツアルト 幻想曲 二短調 K.V. 397

R. シューマン 謝肉祭 Op. 9 - 4つの音符による小さな情景たち -

Préambule（前奏曲）, Pierrot（ピエロ）, Arlquin（アルルカン）, Valse noble（高貴なワルツ）, Eusebius（オイゼビウス）, Florestan（フロレスタン）, Coquette（コケット）, Réplique（返事）, Sphinxes（スフィンクス）, Papillons（蝶々）, A.S.C.H.-S.C.H.A./Lettres dansantes（踊る文字）, Chiarina（チャリーナ）, Chopin（ショパン）, Estrella（エストレッラ）, Reconnaissanc（めぐり逢い）, Pantalon et Colombine（パンタロンとコロンビーヌ）, Valse allmande（ドイツ風ワルツ）, Intermezzo "Paganini"（間奏曲「パガニーニ」）, Aveu（告白）, Promenade（散歩）, Pause（休憩）, Marche des "Davidsbündler" contre les Philistins（フィリスティンと闘う「ダヴィッド同盟」の行進曲）

作曲者や作品に寄せて気の向くまま

今年2006年は、モーツアルト生誕250年とのことで、オーストリアは勿論、日本でも記念する多くのコンサートが開催され、テレビではザルツブルクやウィーンの美しい画像と共に詳しい解説がなされています。限られた紙面でもあり、モーツアルトの人物像に関する解説は控えさせて頂くことをお許しください。

多くの作曲家が意識したことのひとつに「調性」があります。モーツアルトはそのひとりで、音楽の性格に合った調性を用いたものです。俗に言われる「長調の場合、ハ長調を基盤に♯がひとつ増える度に音楽は天や神に近づき、♭がひとつ増える度に音楽は人間味が増す」ということはモーツアルトに於いて特に感じます。本日のモーツアルトは二長調と二短調です。モーツアルトの二長調は最も明るく快活で希望と平和があります。彼は多くの弦楽器やオーケストラの活気溢れる作品にこの調を使っています。穏やかな賛美としてはアヴェ・ヴェルム・コルプス「Ave verum corpus」。逆に二短調は絶望的であり、オペラに於いては殆ど例外なく「復讐」の場面に用いられている様です。あの最後の「レクイエム」も二短調です。本日の「変奏曲」では唯一第6変奏が二短調で書かれている以外は二長調です。「幻想曲」は二短調(途中でイ短調他転調はあります)、最後は二長調で終わっています。この最後の部分はあたかもオペラに於けるコロラトゥーラソプラノを彷彿とさせます。

「デュポールのメヌエットによる変奏曲」の主題、ジャン・ピエール・デュポールは、当時のプロシア王の宮廷室内樂の楽長であり、王のチェロの師でもありました。モーツアルトはデュポールの歓心を得る為に彼に作品(チェロソナタ第6番)から主題を取ってこの変奏曲を作曲したのですが、デュポールにとってはモーツアルトの存在が外來のライバルと感じられ、陰謀と妨害の的となつた、との逸話が残されています。

ところでロベルト・シューマンは今年が没後150年にも拘わらず、取り上げられる回数がモーツアルトの十分の一どころか百分の一にも満たないのは、「没後」の「没」への経緯も関係しているのでしょうか。自殺未遂の2年後に、エンデニヒという町の精神科にて46歳で最期を遂げました。

演奏家によって好みの作曲家というのはあるものですが、シューマンほど「好き」か「弾きにくい」かに分かれる作曲家は居ない様に思います。「没」へシューマンを導いた「病的部分」への先入観でしょうか。生まれ持った性格(最近では「人格障害」とすら言われる)も関係するのでしょうか。

1810年、ロベルト・シューマンはツヴィッカウに生まれました。父親は出版業を営み、母親は外科医の娘でした。父親はロベルトが生まれた頃から憂鬱症と心氣症に悩んでいた様です。ロベルトには姉が居ましたが、1825年に自殺し、その後には父親も亡くなっています。多感な少年には衝撃的過ぎる出来事だったに違いありません。

ロベルトは他の著名な作曲家とは違い、音楽に於ける英才教育は受けていない様ですが、小学校の頃からモッシュレスなどの作曲家に感銘を受け、自分で五線を引いては曲を書いていたそうです。文才も發揮し、ロベルトが13歳の頃既に、父親は短い記事を書くことを許していました。ライプツィヒ大学の法律科に入学し、当時は感性・知性共に発達した青年で社交性もあり、大変人気があったそうです。しかし特に法律が勉強したかった訳ではなくエリート志望だったのでしょう。10代終わり頃から、母親への依存と独立の葛藤に悩んでいました。

ロベルトは、後に妻となるクララの父親であるフリードリ

ヒ・ヴィークにピアノを師事し、18歳の時に9歳の天才少女ピアニストのクララと知り合っています。二人はやがて愛し合う様になりますが、ヴィークの猛烈な反対で引き裂かれていきました。漸くクララの方から歩み寄りがあり、「父親を裁判にかけてでも」との強い意志を示し、結婚に至ることが出来たのは1840年にもなっていました。幸せな年月は「歌曲」の作曲にあらわれ、数ヶ月のうちに約150曲も作曲したほどです。

彼の「幻想曲」は、愛するクララとの交際をヴィークにより裂かれていた1836年に作曲され、1838年に手直しをして1839年に出版されました。彼はこれをリストに献呈しています。当時ベートーヴェン没後10年に向けてリストがボンにベートーヴェンの記念碑を建てる計画を始め、シューマンはこの書きかけであった幻想曲を設立資金として役立てようしました。当初は「フロレスタンとオイゼビウス(後述)による大ソナタ」とのタイトルにて、各楽章は「廃墟」「トロフィー」「棕櫚(勝利・平和・歡喜の象徴)」と名付けられています。その後、クララとの関係が葛藤しつつも良い方向に向かいつつある中、この作品も手直しがされ、これらのタイトルは全て削除され、「幻想曲」とのタイトルの、クララへの心情の動きが溢れる作品として出版に至りました。曲の冒頭に、「モットー」としてフリードリヒ・フォン・シュレーゲルの詩を4行掲げています;

Durch alle Töne tönet

Im bunte Erdtraum

Ein leiser Ton gezogen

Für den der heimlich lauschet

【色とりどりの俗世の夢の中 さざめきの中にはあれど ひとつのひそやかな音は響き続ける そっと耳を傾ける人には】
第一楽章の終わりは、ベートーヴェンの歌曲「はるかなる恋人に」の断片を用いています。

「謝肉祭」(Carnaval)は1833年から1835年にかけて書かれた力作です。「4つの音符による愛おしい情景」という副題を付けています。彼のかつての婚約者であったエルネスティーネ・フォン・フリッケンという女性の出身地がAsch(アッシュ)という町であり、しかもその綴りの A・S・C・H という文字は「SCHUMANN」の中にも含まれた4文字であり、その事に偶然の面白さを感じて作曲しました。ASCHは「As(変イ)・C(ハ)・H(ロ)」もしくは「A(イ)・S(=Es 変ホ)・C(ハ)・H(ロ)」であり(ロは変ロの事もあります)、これらの4つの音を「場合の数」的に並べ替え、特に気に入った音列を主要モチーフに使って書き上げたのが「謝肉祭」です。それぞれの登場人物や情景は何という魅力でしょう!哀愁に満ちた「ピエロ」、ユーモアで人々を楽しますもうひとりの道化役者「アルルカン」。「オイゼビウス」と「フロレスタン」は後述致しますがシューマン自身。「フロレスタン」の中で見え隠れさせる彼自身のOp.2「蝶々」のモチーフは何と粋な遊び!「キアリーナ」は「クララ」のこと、「エストレッラ」は前述の「エルネスティーナ」です。エルネスティーナはピアノの生徒としてヴィーク家に下宿しており、Aschの町の男爵、フォン・フリッケンの私生児でした。ところがロベルトは彼女を「裕福なボヘミアの男爵の令嬢」とと思っていたので、素性が分かるや、別れてしましました。「パンタロンとコロンビーナ」は道化芝居の中の恋人同士で派手な衣装が特徴。「謝肉祭」の終曲には17世紀の歌と踊り「Grossvaterstanz(おじいさんの踊り)」が交錯して登場しますが、この曲はOp.2のPapillonsにも登場させています。(チャイコフスキイも「くるみ割り人形」の第1幕に使っています。)

シューマンは若い頃から他人を鋭く捉えては戯画を描く才能に長けていたとのことですが、私には「謝肉祭」があたかもシューマン的Bilder einer Ausstellungの様に感じられます。それも、丁寧に色づけされた風刺的な人物像や情景画の...。

さて、没後 150 年に際し、彼の性格（病的なものも含め）と作品との関連性を取り上げることも、作品の素晴らしさを味わう第一歩となるのではないかと思います。どこまでも夢を追い続けて進む曲想も、勝利に向かって進む付点のリズムも、コロコロと気分の変わるシューマンならではの表現も私には魅力的なものを感じます。それが一体どこから来るのか…。

しかし証拠となる医学的な記録は、医学が現代より比較にならないほど遅れていた為不充分であり、何よりも夢を与えるべき音楽の存在を壊しかねない内容にも触れざるを得ず、追究することには躊躇いも感じます。ただ、もしシューマンが現代に生きていたなら…競争社会の現代では製薬会社も次々と精神科の分野の薬も比較にならない飛躍を遂げている筈、46 年以上生きてもっと多くの作品を残したことでしょう。その反面シューマンらしい魅力を持った作品は多く生まれたであろうか、と複雑な思いです。

ロベルト・シューマンの病的傾向ですが、19 世紀当時は何でも「鬱病（気分障害）」「精神分裂病（統合失調症）」「躁鬱病（双極性障害）」（括弧内はここ数年間に改定された名称）辺りの病名を付け、不要な、しかも開発途上極まりない薬が処方された事は想像に余りあります。彼もそのひとりだったのではないでしょうか。不要な投与で、生まれ持った性格一作品に良い個性を与えていた筈の一をねじ曲げ、脳に器質的ダメージすら与え、思考回路を狂わせる結果となった気がします。（これはモーツアルトに於いても言える事だと思いますが。）本当に薬が必要な鬱病や分裂病であったなら、細かい五線上にて作曲など出来る筈もありません。或いは逆に、彼は絶対音感が無かったそうですから、あの様な細かいオーケストラの作品などを書くことで、許容量を超えた脳の酷使をして異変を来してしまったのでしょうか。又、妻クララの一回分のコンサートのギャラは、夫ロベルトの一年分の収入に匹敵していた様ですから、ロベルトの性格を考えると、心理的に何も影響を与えない筈はありません。これらは全くの度素人の独断と偏見かも分かりませんが…。

現代社会では「普通でない」（本来「個性の違い」と捉えるべき、と思うものすら）＝「病気」「症候群」「障害」と名付けられている様ですが、彼が現代に生きていたならどんな病名を付けられたのでしょうか。

実際のところ彼は「ヒステリー（解離性障害）」だったと言われています。解離性（転換性）障害も多くの種類に分別されている様ですが、1854 年には、楽譜を書いていたかと思えば突然家を出、衝動的にライン川に身を投げてしまいました。

それは「解離性遁走」（自分でも分からず別な場所に行ってしまうこと）とも受け止められます。一命は取り止めたものの、エンデニヒの精神病院に入院し、2 年後に死亡した死因は「拒食症」という説が有力です。

「多重人格（解離性同一性障害）」との点もシューマンではよく取り上げられます。自らを「オイゼビウス」と「フロレスタン」との名前を使い分ける姿は、「二重人格」的でもあり「人格転換」とも思えなくもありません。この「オイゼビウス」は大変瞑想的・夢想的で、「フロレスタン」は情熱的で行動的・寧ろ衝動的、時にはウィットに富んでいます。この二つの名前はシューマンが Neue Zeitschrift für Musik（「新音楽時報」：當時優秀であったショパン、メンデルスゾーン、 Brahms を賞賛の言葉でシューマンが世に紹介）に於いて文章を書く時のペンネームでした。「謝肉祭」の中にも登場します。そして「謝肉祭」の終曲のタイトルは、聖書のペリシテ人を攻撃するダヴィデをもじって、古い音楽に対向して行く新しい音楽の姿勢を表現しています。因みに Op. 6 の「ダヴィッド同盟舞曲集」では 18 曲それぞれにフ

ロレスタンの「F」、オイゼビウスの「E」が記入されています。

す。

ロベルトはこだわりの強い性格だった様でもあります。それが良く表れた例とは、文字列を音楽にする、という作風がありました（これは他の作曲家もやっていることですが）。前述の「謝肉祭」のみならず、Op. 1 の ABEGG 変奏曲は ABEGG（イ・変ロ・ホ・ト・ト）という音列を使っての変奏曲です。

ところで、前途洋々たるピアニストとしての人生を絶たざるを得ず作曲家に転向したのは、弱い指を鍛える器具を使って指を壊した為である、との話は有名です。しかしこれを、義勇軍への徴兵を免れる為の、転換神経症が故の詐称であった、本来は完治可能な腱鞘炎程度のものであった、とまで述べる学者すら居る現代医学は如何なものでしょうか。

いずれにせよ、シューマンの作品を演奏することはあらゆる角度から大変難しいものです。いくら技巧面に長けていたとしても、性格的な面白さを聴き手に伝えなくては意味がありません。余りに健康的過ぎる所謂優秀な演奏もシューマンらしくありません。実際、クララは名人芸的な作品も好んで弾いていましたが、夫ロベルトの作品は生前には弾かず、「謝肉祭」は死後数年後、「幻想曲」に於いては 10 年も経ってから演奏した、と言われます。曲想の頻繁なる変化は他の作曲家に類を見ず、構成に囚われ過ぎることなく気分の赴くまま弾けることは演奏家にとりまして大きな魅力です。どんなに瞑想に耽っても耽りすぎることはなく、衝動性に駆られた思いつきも許され、どんなに熱っぽく語っても語りすぎることはありません。

まとまらなくなりましたが、クララはロベルト亡き後も 40 年間を母として祖母として、何よりも偉大なピアニストとして生涯を生き抜いたことを書き添えて終わりに致します。

（文責・奥 千絵子）

【奥 千絵子 プロフィール】

東京生まれ。幼少から音楽に親しみ 4 歳頃より NHK や文化放送の音楽番組にてピアノ演奏。8 歳より大学卒業時まで故・永井進氏にピアノを師事。1973 年東京藝術大学ピアノ科を優秀な成績で卒業し、同校主催卒業特別演奏会、及び讀賣新聞社主催新人演奏会に出演。在学中田村宏、松野景一、松浦豊明の各氏にも師事。1974 年ウィーン・国立音楽演劇大学に入学し、故・ヨーゼフ・ディヒラ一、故・ディーター・ヴェーバー、ノエル・フローレスの各氏に師事。夏期セミナーにて故・スタニスラフ・ネイガウス氏の教えを受ける。1977 年大学を優秀賞を伴って卒業、引き続きザルツブルク・モーツアルテウム音楽演劇大学にてハンス・ライグラフ氏に師事。1975 年マリア・カナルス国際音楽コンクール銀メダル。1976 年エレーナ・ロンブロ・シュテパノフピアノコンクール第一位。1977 年ミュンヘン国際音楽コンクール第三位（首位）。1978 年ブザーニ国際ピアノコンクール入選。1976 年よりウィーンをはじめとするオーストリア各都市にてリサイタル。1977 年ウィーン楽友協会大ホールにて協奏曲。1978 年ベルリンフィルハーモニーホールに於けるリアス放送交響楽団との共演でヨーロッパデビュー。ドイツ・オーストリアを中心には数多くのラジオ録音やリサイタル。1981 年帰国。ソロ活動の他、室内楽、伴奏、編曲。ピアノ指導に於いてはプロ、アマを問わず一人一人に試行錯誤を重んじる。1998 年乳癌と膠原病での不調を押してのリサイタル。この時のライヴ録音が CD「名曲のたのしみ」としてリリースされ、医学的にも大きな記録となっている。同年 10 月乳癌摘出手術。1999 年 7 月より膠原病皮膚筋炎の為 4 ヶ月の入院を経て、現在も治療が続いている。2000 年入院した大学附属病院にてチャリティーリサイタル。以降、演奏活動を再開し、現在に至る。今年 10 月 25 日、ソロの CD「樂の音に寄せて」がリリースされる（2001 年収録）。

